

## 『純粋理性批判』第二版演繹論の二段階構成を再検討する

久保田 智也

### 1. はじめに

カント『純粋理性批判』第二版「純粋悟性概念の超越論的演繹」(以下、「B版演繹論」)において、前半(第15-20節)と後半(第24-26節)の議論はどのように関連しているのか。カントの説明からして、前後半がそろって初めてカテゴリーの超越論的演繹が完遂されるはずであるにもかかわらず、前半の結論と後半のそれは、表現上ほとんど区別がつかない。前者によると、「従って、与えられた直観における多様は必然的にカテゴリーに従う」(B143)。後者によると、「従って、カテゴリーは[...]経験の全ての対象にア・プリオリに妥当する」(B161)。いずれも、私たちの思考の枠組みとしてのカテゴリーが客観的妥当性を有する(認識の対象に適合する)と述べているようである。これらの結論は本当に同じことを述べているのか。そうであるならば、後半の議論は実質的にどのような進展ももたしていないのではないのか。そうでないならば、二つの結論はどのような関係にあるのか。そうした疑問が避けがたく生じる<sup>1</sup>。

このテーマに関する古典的論文 Henrich 1969 によれば、二つの結論は異なることを述べており、前半の結論は後半の結論を導くための前提をなしている。つまり前後半の議論は、後半の結論(演繹論の最終的結論)に至る一連の論証における第一段階と第二段階をなしている。このことにはテキスト上の裏付けがある。それゆえ争点は、前後半がいかにして二段階の論証をなしているのかである。こうした問題設定そのものは研究者たちに広く受け入れられ、前後半がどのような二段階構成をなしているのかについてさまざまな説明が与えられてきた。

そして中野 2021 が指摘するように、今日においてなお、端緒を開いたヘンリッヒ自身の見解がもっとも有望である。その見解は種々の批判にさらされてきたが、そのいずれも致命的なものではなかった。また中野は、ヘンリッヒ自身が怠ったテキストによる裏付けを行ってみせている。以下では、ヘンリッヒのアイデアと中野による補強を合わせて「ヘンリッヒ・中野解釈」と呼ぼう<sup>2</sup>。

本稿の目的は、この解釈について、新たに問題点を指摘し、B版演繹論の二段階構成を捉え直すことである。予め結論を述べておくと、B版演繹論は、前半が

カテゴリーの適用（思考においてカテゴリーを使用しなければならないということ）を示し、それを前提として後半が適合（カテゴリーの使用が対象を正しく捉えているということ）を示すという二段階構成をとっている<sup>3</sup>。実のところこの構成はカント自身によって予告されていたが、従来の研究者はその点を見過ごしてきた。また、この見方をとることで、前半の議論は、カテゴリー使用の正当化に寄与するとともに、カテゴリーの形而上学的演繹（A76-80/B102-5）を補完するという役割も担っているということが明らかとなるであろう。

考察は以下のように進む。第2節ではヘンリッヒ・中野解釈を紹介し、その全体を支える「直観の統一」概念の理解は確かな根拠を欠くということを示す。第3節では「直観の統一」が別の仕方で理解できることをテキスト的な根拠とともに明らかにする。第4節では、その「直観の統一」理解や、他の文脈上の考慮を踏まえ、二段階構成の内実について新たな捉え方を提示する。そして最後の第5節では、その捉え方が有する解釈上の利点を述べることになるだろう。

## 2. ヘンリッヒ・中野解釈の検討

初めにヘンリッヒ・中野解釈の概要を述べよう。彼らの二段階構成の把握は「直観の統一」概念の一定の理解に基づいている。そして、彼らの解釈の難点もまたその概念に関わっている。

### 2. 1 概要

ヘンリッヒ・中野解釈は、二段階構成を明らかにするにあたり、前半の証明を支える一つの前提に着目する。それは、次の注のなかで述べられている。

[前半の結論の] 証明根拠は、それを通じて対象が与えられるところの直観の表象された統一に基づいている。（B144, Anm.）

これによると、前半の証明は「直観の統一」と呼ばれる事態が成立しているということ的前提していたのである。このこと自体は争点にならない。

そして、ヘンリッヒらは前後半の関係を次のように説明する。すなわち、カントは前半において直観の統一が成り立つことを仮定し、そこからカテゴリーの客観的妥当性を導いている。それゆえ結論としては「直観の統一が成り立つならば、その直観に対してカテゴリーは妥当する」という仮言的な主張が得られる。これ

に対して後半では、「私たち感性的直観について、直観の統一は成り立つ」ということを明らかにし、これと前半の結論とを合わせて「私たちの感性的直観に対してカテゴリーは妥当する」という演繹論の最終的結論を導いているのだ、と。

二段階構成のこうした捉え方は、次のような理路によって正当化されている。まず、「直観の統一」が前半の議論の前提をなすということは上記引用のとおり揺るがしがたい事実である。さらに、ヘンリッヒや中野によると、「直観の統一」とは直観の形式としての空間と時間の単一性を意味する（Henrich 1969, 645-7; 中野 2021, 282-4）。そしてB版演繹論後半（特に第26節）では、時間と空間の単一性がいかにして実際に成立しているのかが説明され、そこから後半の（つまり、B版演繹論全体の）結論が導かれている。すなわち、後半では、「直観の統一」が成り立つことを示すことにより、カテゴリーの客観的妥当性が導かれているのである。するとたしかに、前半が「直観の統一」の成立を正当化めきで前提して、それを用いてカテゴリーの客観的妥当性を導いたあと、後半が「直観の統一」の成立を証明してみせることにより、カテゴリーの客観的妥当性が十全に確証されるというヘンリッヒ・中野的な構図はもっともらしく思われる。

明らかのように、この構図、とくに後半が前半の前提の正当化を行なっているという点は、「直観の統一」は時空間の単一性を意味するという解釈に依拠している。しかし以下では、「直観の統一」は必ずしもこのようには解釈できないということを明らかにしよう。実際には、ヘンリッヒにせよ中野にせよ、この理解を決定的に確証する根拠を提示できていないのである。

## 2. 2 問題点

実のところ、ヘンリッヒは自らの「直観の統一」解釈の証拠を示していない。前半で「直観の統一」と呼ばれる事柄と、後半で論じられる時空間の単一性とを同一視してよい理由は、少なくとも Henrich 1969 のなかには見つからない。

しかし、中野 2021 がこの不足を補っている。中野は、二つのテキストに訴えてヘンリッヒの見方を正当化しようとする。しかし、それらを考慮に入れてもお、彼らの「直観の統一」理解には疑問が残るということを以下に示そう。

中野が持ち出す第一の根拠は第17節の注（B136, Anm.）である。たしかに、カントが初めて「直観の統一」に言及するとき（B143）、この概念については第17節を参照するように書いているから（後述を参照のこと）、そこに手がかりを求めるのは自然なことである。カントはその注において次のように述べる。

空間と時間とそれらの全ての部分は直観であり、したがってそれらが自らのうちに含む多様なものを伴う単一の表象であり、[...]したがって、単なる概念ではない。[...]空間と時間とそれらの全ての部分のこの単一性は応用において重要である(第26節を参照のこと)。(B136)<sup>4</sup>

この注は時空間の単一性について簡単にコメントした上で、詳しい説明は後半の議論(第26節)を参照するように言う。この注の内容は、仮に「直観の統一」が時空間の単一性を意味するとするなら、ヘンリッヒ・中野的な二段階構成の把握と符合する。すなわち、カントはこの注においてこそ、前半で前提した「直観の統一」つまり時空間の単一性を後半で根拠づけると宣言しているように見えるのである。

しかしながらこの注においてカントは、「直観の統一」が時空間の単一性を意味すると明示的に述べているわけではない。実際のところ、注において「直観の統一」という表現は出現しない。また同様に、前半の論証が何を前提しているのかについて説明しているようにも見えない。したがって、この注だけに基づいて「直観の統一」の内実を確定することはできないだろう。

第二の根拠は次の箇所である。

先の証明[B版演繹論の前半]において次のことは捨象できなかった。すなわち、直観のための多様が悟性の総合に先立って、またそれから独立に与えられなければならないということである。(B145)

中野によれば、ここでカントが述べているのは次のようなことである(中野2021, 285)。すなわち、B版演繹論前半の議論は「多様な直観的表象は空間時間において、それも統一を備えた空間時間において与えられなければならない」ことを前提していた。

しかし、カントは本当にそれほどのことを述べているのだろうか。この箇所で行われているのは、前半の議論が、直観が悟性の働き(概念的思考)に先立って与えられているという前提を置いていたということのみであり(文脈からして、その言わんとするところは人間による知的直観の否定である)、統一にせよ時空間の単一性にせよ、直観がいかなる特徴を備えているかについては何も言われていない。実際、直観が「どのように与えられるかということは、ここでは規定されていない」(B145)とカント自身が付け加えているのである。したがって、こ

の箇所からも「直観の統一」とは何であるかを読み取ることはできないだろう。以上から、中野が提示するいずれのテキストもヘンリッヒ的な「直観の統一」解釈の決定的な証拠にはならないと言える。

しかるに、ヘンリッヒ・中野的な立場から次のような応答がなされるかもしれない。たしかに二つめに挙げた箇所については無理な読み込みがあった。だが一つめに挙げた箇所について、時空間の「単一性 *Einzelheit*」という表現が「統一 *Einheit*」に対応しているとしても言葉づかいとして不自然ではないだろう。実際、カテゴリー表には「単一性 *Einheit*」という項目があり、B 版演繹論後半でも時空間の単一性が「統一 *Einheit*」(B160, Anm.) と呼ばれることがある。

しかしながら、「直観の統一」を理解するときには B 版演繹論前半の固有の文脈に注意を払う必要がある。その冒頭の第 15 節で注意されているように、前半において「統一 *Einheit*」概念は原則的に悟性の働きもしくはその結果を意味し、数的単一性 *Einheit* とは区別される (cf. B131)。また「直観の統一」を明示的に特徴づける唯一の箇所、第 21 節の注においても、数的単一性というよりは悟性の働きとの関係から説明が行われている (cf. B144, Anm.)。よって、もし「直観の統一」と「単一性」の表現上の親和性から両者を同一視するならば、それは安易すぎると言わざるをえないだろう。

以上より、ヘンリッヒの「直観の統一」解釈を決定的に裏付けるテキストは存在しないと見える。以下ではこれに代わる解釈を提示することにしよう。それによれば、「直観の統一」を理解する手がかりは第 17 節の注ではなく本文のなかにある。

### 3. 「直観の統一」を再解釈する

B 版演繹論における術語「直観の統一」の初出は第 20 節の次の文である。

感性的直観における多様な所与は統覚の根源的総合的統一のもとに必然的に属する、なぜならこれによってのみ直観の統一は可能であるから (第 17 節)。(B143)

つまり、「直観の統一」が成り立つならば「統覚の根源的総合的統一」が成り立っていないなければならない。この文に付された「第 17 節」という参照指示からして、その節にこれと同義的な文が見つかるはずである。その文を特定し、上記引

用と照合すれば、「直観の統一」概念の内実を明らかにできるだろう。

その文は、先述した中野の見立てとは異なり、第 17 節の本文中に見つかる。

まさに同じ全ての直観の可能性の、悟性への関係における最高原則は、直観の全ての多様が統覚の根源的総合的統一の条件に従うということである。

(B136)

この引用が述べているのは、直観が悟性との関係に立つならば統覚の根源的総合的統一が成り立っていないなければならない（成り立たなければ、直観と悟性が関係することはできない）、ということである<sup>5</sup>。「悟性への関係における」という文言は、「最高原則」が適用される条件を明示するものである。

これが第 20 節からの引用文に対応すると考えられる理由は二つある。第一に、「しかしかならば統覚の根源的総合的統一が成り立っていないなければならない」という形式上的一致がある。第二に、上述のとおり B 版演繹論で「統一」は原則的に悟性の働かないしその結果を意味する。上の二文の対応関係を認めるならば、「直観の統一」は「悟性への関係」、つまり悟性が直観に何らかの作用を及ぼすことを意味することになり、B 版演繹論での語「統一」の用法と整合的である。

したがって、「直観の統一」は「悟性への関係」であると解釈されうるだろう。さらに、「悟性への関係」の内実が上記引用の直後で敷衍されている。

直観の全ての多様な表象は、それが一つの意識において結合されうる限りにおいて第二の原則 [統覚の根源的総合的統一] に従う。というのも、その原則に従うことなしには何物も直観を通じて思考あるいは認識されえないからである。(B136-7)

ここでは、「直観が悟性との関係に立つならば統覚の根源的総合的統一が成り立っていないなければならない」という上記の「最高原則」が二度言い換えられている。一度めには、直観が一つの意識において結合されるならば統覚の根源的総合的統一が成り立つ。二度めには、対偶をとって、統覚の根源的総合的統一が成り立たなければ直観についての思考ないし認識も成り立たないと。この言い換えに従えば、直観の「悟性への関係」は一つの意識における結合であり、すなわち、直観の対象についての思考である。すなわち、直観の対象について例えば「この物体は丸い」のような判断を行なっているということである。

以上より、「直観の統一」とは主体が直観の対象について思考している、ないし判断を下しているということを意味することが明らかになった。前半が「直観の統一」の成立を前提するということは、主体がすでに直観の対象について思考しているということを前提することにはほかならない<sup>6</sup>。この「直観の統一」解釈を根拠としてB版演繹論の二段階構成を解き明かそう。

#### 4. 二段階構成を捉えなおす

二段階構成の新たな捉え方を提示するため、まずは、演繹論に先立つ第14節「カテゴリーの超越論的演繹への移行」(A92-5/B124-9)において予告されている、カテゴリー演繹の基本方針を紹介する。それによると、演繹論は初めにカテゴリーの必然的な適用を証明し、次にそれを前提としてカテゴリーの必然的な適合を証明するという二段階で遂行される。次いで、この二つの段階がB版演繹論の前後半にそのまま対応するということを、上述の「直観の統一」解釈をふくむ三つの根拠によって示そう。最後に、二段階構成をこのように理解することによってもたらされる、ヘンリッヒ・中野解釈にはない読解上の利点を確認する。

ここであらかじめ、「適用」と「適合」という術語の定義を述べておく。カテゴリーの対象への「適用」とは、主体が対象をカテゴリーに即して思考することである。例えば、ある人が目の前の対象について、それはりんごという実体であり、赤色という属性を有しており、強い圧力をかけられると、それが原因となって潰れてしまうという結果がもたらされると(無意識的にであれ)考えているとき、その人は対象に実体・属性・因果性などのカテゴリーを適用している。重要なのは、人がPと考えることはPの成立を含意しないので(カントによれば人に知的直観の能力はない)、主体がいつでもカテゴリーを適用するからといって、対象がいつでもカテゴリーに当てはまる構造を有するとは限らないということである。例えば私たちが世界を因果的なものと考えることと、世界が実際には因果的なあり方をしていないということは両立する。カントによれば、このように適用が空回りしてしまう可能性こそがカテゴリーの演繹を必要かつ困難なものとしている(cf. A89-90/B122-3)。他方で、カテゴリーの対象への「適合」とは、私たちが対象をカテゴリーのもとで思考し、かつ、対象が実際にカテゴリーに当てはまるありかたをしているということ、つまり適用の正しさを意味する。演繹の最終目標はカテゴリーの適合を証明することである。

#### 4.1 カテゴリー演繹の方針予告

第14節においてカントは次のように主張する。

全てのア・プリアリな概念の超越論的演繹は、探究全体がそこへと向けられなければならないある原理を有している。すなわち、ア・プリアリな概念が経験の可能性（経験のうちに見出される直観の可能性にせよ、思考の可能性にせよ）のア・プリアリな条件として認識されなければならないということである。（A94/B126）

ア・プリアリな概念の演繹（対象への適合性の証明）は、当の概念なしには経験がそもそも成立しないということを示さなければならない。特に純粋悟性概念の場合は、それが思考のための条件になっていることを示さなければならない（cf. A93/B126）。この「原理」は、「探究全体がそこへと向けられなければならない」という言い方が示唆するように、演繹において正当化なしに使用してよい前提というよりは、それ自体が演繹の行程のなかで証明されるべきことがらである。

それではなぜ演繹においてこの「原理」を証明することが必要になるのか。その理由は、「原理」とカテゴリーの対象への適合との次のような連関にある。

したがって、ア・プリアリな概念としてのカテゴリーの客観的妥当性は、カテゴリーによってのみ経験が（思考の形式という点で）可能であるということに基づいているだろう。というのもそのとき、経験の対象はおよそただカテゴリーを介してのみ思考されうるので、カテゴリーは必然的な仕方であ・プリアリに経験の対象へと関係するからである。（A93/B126）

ここでの説明によると、私たちが対象について思考するときいつでもカテゴリーを用いるということを示せば、それを前提として、カテゴリーは対象につねに適合すること（客観的妥当性）も示せる。すなわち、上で述べた「原理」から、カテゴリーの対象への適合が導かれる。それゆえ、カテゴリーの対象への適合を証明するという演繹の課題に答えるためには、「原理」を証明すればよい。演繹という探究に「原理」の証明が課せられる理由は、「原理」を証明しさえすればそこからカテゴリーの対象への適合を示せるからである。

以上から、カテゴリーの演繹にあたりカントは次のような二段階での論証を企図していると考えられる。第一段階では、私たちが対象について何かしら思考す



るといふ仮定から、私たちが当の思考の対象にカテゴリーを適用するということ(演繹の「原理」)を導く。第二段階では、この「原理」を前提として、対象にカテゴリーがつけに適合することを導く。そして、この企図が演繹論の本文においてどのように実現されているのかを考えれば、二段階構成の内実はおのずと明らかになるだろう。

#### 4.2 新しい二段階構成観：前半が適用を示し、後半が適合を示す

A版演繹論の内部には、上記の方針をそのままなぞるようにして議論を要約する箇所がいくつかある(cf. A97, A111, A129-30)。他方で、B版演繹論にそのような要約は見つからない。しかしながら、カントがB版において論証方針を変更したと考えるべきではない。なぜなら先に見た第14節のテキストは、B版にもそのまま引き継がれているからである。

実際のところは、B版演繹論の前後半が、第14節において予告された二つのステップに該当すると考えるべきである。つまり、B版演繹論前半では、思考においてカテゴリーがつけに対象に適用されることが証明される。そして後半では、前半での結論を前提として用いることで、カテゴリーが対象につねに適合することが示される。本稿は、ヘンリッヒ・中野解釈に代わって、B版演繹論の二段階構成をこのように理解する<sup>8</sup>。

こうした理解をとるべき理由は次の三つの点にある。第一に、この理解に依拠して、前半の議論がなぜ「直観の統一」を前提としたのかについて自然な説明を与えられる。というのも、これまでの考察によれば、B版演繹論の前半は、主体が対象について思考しているという意味での「直観の統一」を仮定している。しかし、なぜそのような仮定を置くのだろうか。カントの予告する演繹方針の二つのステップにB版演繹論の前後半が対応するという理解をとるなら、次のように説明できる。この理解によれば、前半の議論は、思考におけるカテゴリーの適用の不可欠性を示さなければならない。しかるに、そのためには、私たちが直観の対象について思考しているということを前提して、その必要条件にはカテゴリーを対象に適用することが含まれているということを明らかにすればよい。それゆえ、直観の対象について思考がなされているという意味での「直観の統一」が前半において前提されることは、上記の二段階構成観のもとでは、当然の成り行きなのである。

第二に、この理解に基づいて、B版演繹論の前後半の結論を区別することができる。すなわち、上の方針の二段階とB版演繹論の前後半を重ね合わせるとき、

前半の結論はカテゴリーの必然的な適用を述べ、後半のそれはカテゴリーの必然的な適合を述べるものとして区別される。B 版演繹論の前後半を一つの論証をなす二つの段階として理解するためには、それぞれの結論は何らかの仕方で区別することが要件となるだろうが、本稿はこの要件に応じることができるのである。

第三に、カントが B 版演繹論前後半の関係やそれぞれの役割について詳細に説明しているほとんど唯一の箇所は、上のような二段階構成観と整合的に読みとくことができる。

演繹において私は、カテゴリーは感性から独立に単に悟性において生じるので、悟性によってカテゴリーを介して直観に付与される統一だけに注目するため、経験的直観に多様が与えられる仕方をまだ捨象していなければならない。後に（第 26 節）、感性において経験的直観が与えられる様式から、次のことが示されるだろう。すなわち、その様式の統一は、第 20 節によるとカテゴリーが所与の直観一般の多様に指定するという統一にはかならない。したがってまた、私たちの感官の全ての対象に関するカテゴリーのア・プリアリな妥当性が説明されることにより、演繹の目的が初めて完全に達成されるだろう。（B144）

これによると、第 20 節（前半の結論部分）では、カテゴリーが一定の「統一」を「直観一般の多様に指定する」ことが示された。これはすなわち、主体が思考において対象につねにカテゴリーを適用することが示されたということだと理解できる。

すると、B 版演繹論前半で「経験的直観に多様が与えられる仕方」が捨象されたということにも説明がつく。というのも、本稿の見立てでは、前半の主題は悟性が「カテゴリーを介して直観に付与」する統一であり、すなわち、思考においてつねにカテゴリーが適用されるか否かが問題である。しかるに、これはもっぱら私たちの思考の能力を考察することで答えられる問いであり、経験的直観の能力を考慮に入れる必要はない。それゆえ捨象が行われたのである。

最後に、上記引用で「後に」示されると言われている事柄は次のように理解できる。「カテゴリーが所与の直観一般の多様に指定するという統一」とは、主体が思考において対象につねに適用する、カテゴリーに即したものの見方を意味する。これに対して「感性において経験的直観が与えられる仕方」の「統一」とは、要するに、私たちが知覚する時空的対象の実際の在り方（のうち最も一般的な側

面)のことである。それゆえ、後者の「統一」が前者の「統一にほかならない」とは、思考におけるカテゴリーの対象への適用が、あるいはカテゴリー的なものの方が、対象の実際の在り方に当てはまるということを意味する。つまりB版演繹論の前半は必然的な適用を示し、後半は必然的な適合を示すという二段階構成は、ここでカント自身によって表明されているのである<sup>9</sup>。

前半が適用を示し後半が適合を示すという二段階構成の理解は以上のように正当化される。最後に、この理解がヘンリッヒ・中野解釈に対してどのような点で優れているのかを確かめておこう。

#### 4.3 上記の二段階構成観をとることの利点

上に提起した解釈の、ヘンリッヒ・中野解釈に対する優位としてすでに明らかなのは、「直観の統一」をより文脈に即した仕方で理解できるという細かな一点のみである。というのも、4.2で確認した、前後半の結論を区別できるとか、第21節におけるカント自身の説明にもっともらしい読み筋をつけられるとかいったことは、全ての解釈が最低限満たすべき要件であり、ヘンリッヒ・中野解釈もまたこれをクリアしているからである。したがって、あえて本稿の立場を採用すべき決定的な理由は述べられていないと言える。そこで以下では、ヘンリッヒ・中野解釈にはない本稿の解釈の利点を確かめておこう。

まず、前半が適用を示し後半が適合を示すという構図をとることにより、カントがB版演繹論を二段階構成としたことの動機を説明できる。というのも、4.1において確認したように、カントは演繹論に先立つ第14節で二段階による証明方針を示していた。B版演繹論は、その方針に忠実に組み立てられることで、現にあるような二段階構成をなしているのだと考えられる。というのは、予告しておいた方針との対応をあからさまにすれば、それだけA版演繹論よりも可読性を高められるという見立てがあったのだろう。これに対してヘンリッヒ・中野的な二段階構成観では、カントがその構成を選んだ動機を説明できない。とりわけ、一旦「直観の統一」を仮定してカテゴリーの妥当性を導き、その後になって仮定を証明するという順序を選んだ動機が不明なままである。

また、ヘンリッヒ・中野解釈をとると、第14節で示された方針がどのように演繹論の本文に反映されているのかがはっきりしなくなる。カントが改版において第14節の該当箇所を保持している以上、B版演繹論もその方針に則っていると考えるべきである。対照的に、本稿の立場からはこの点を容易に説明できる。

最後に、本稿の見方をとるなら、カテゴリーの形而上学的演繹(A76-80/B102-5)

の説明不足の補完を B 版演繹論前半に求めることができる。形而上学的演繹は、私たちの有するカテゴリーが件の 12 個であることを示そうとしたことで知られているが、カントはその箇所において、そもそも私たちがカテゴリー（思考の普遍的な枠組み）を有するというより基礎的な事実を証明することをも企図していた（cf. A55-7/B79-82）。しかしながら、そこでの論述は根拠を欠く主張や飛躍した推論に満ちており、あらゆる解釈者の悩みの種である。ところが本稿の見解をとるなら、私たちがカテゴリーを有するということの詳細な論証は、B 版演繹論の前半で行われていると考えてよい。なぜなら、思考においてつねにカテゴリーが適用されることの証明は、そのまま、思考において用いざるをえない概念を私たちが有することの証明になるからである。他方で、ヘンリッヒ・中野解釈に立つ限り、形而上学的演繹の欠陥はそのまま放置され、私たちはカテゴリーを有するのかという問いに答えるための手がかりをカントから引き出すことはできないかもしれない。

## 5. おわりに

本稿は、ヘンリッヒ・中野解釈を批判し、次の二つを主張した。第一に、B 版演繹論前半において前提される「直観の統一」とは、主体がすでに直観の対象について思考を行なっているということである。第二に、B 版演繹論の二段階構成は、前半がカテゴリーの必然的な適用を示し、それを前提として後半が必然的な適合を示すものと理解できる。

最後に、B 版演繹論の大枠としての構成に関わるこれらの主張が、前後半の内部の読解におよぼす影響を一つだけ記しておこう。ヘンリッヒや中野に限らず今日までの多くの研究者は、前半の前提「直観の統一」は時空間の単一性もしくは現象の合法則性として解し、前半の結論はカテゴリーの対象への適用というよりは適合を述べるものと見なしてきた。しかしながら、本稿の主張によれば、前半の前提も結論も、対象（時空間であれ現象であれ）がどのようにあるのかについては何も述べていない。前半の議論は一貫して私たちが対象をどのように思考するかにのみ関わっている。この見立てに従うなら、「統覚の根源的総合的統一」という前半の鍵概念は、例えば合理的な判断主体が自らの諸信念の整合性を保とうとする自己制御の働きのように理解できるかもしれない。この概念はもっぱら、感覚印象を何らかの意味で「まとめ上げ」ることでカテゴリー的な秩序を成り立たせる作用として解されてきたが、本稿の立場をとるなら、少なくとも B 版演繹

論前半にはそうした不可解な作用を読み込まずに済む。思うに、B版演繹論の旧版に対する優位は、対象を知覚することと思考することを一緒にたにせず、その両方について前半と後半でそれぞれ個別に説明を与えた点にある。本稿のように「直観の統一」を対象についての概念的思考として解することで、この美点を損なわない解釈が可能になるのである。

<sup>1</sup> なお、いずれにしても演繹の最終目標はカテゴリーの客観的妥当性、あるいは適合(経験の対象が総じてカテゴリーに当てはまる在り方をしているということ)を証明することである、あるいはそうでなければならないということは、Gomes 2010、Conant 2016などの概念主義的なカント解釈研究によってほとんど論駁の余地なく示されている。本稿もまたこの理解に従う。

<sup>2</sup> ヘンリッヒ的な二段階構成観に対するさまざまな批判を概観したうえで反批判を展開する研究として、Evans 1990、中野 2021 が挙げられる。また、B版演繹論前後半が二段階構成をとっていることを認めつつ、ヘンリッヒとは異なる仕方での構成を理解しようとするものとしては、先述のEvans 1990や、Kitcher 1993、Allison 2015などを参照のこと。また、Caimi 2014はB版演繹論前後半の関係についての主要な立場をヘンリッヒ以前から今日に至るまで概観しており有益である。なお、前後半を一つの論証の二段階として読むという主流派の見解に反対する研究もわずかながらある(cf. Schulting 2017)。

<sup>3</sup> なお、本稿における「適用」と「適合」の用法はヴァン・クリーヴに由来し、それぞれ英語“apply”の他動詞用法と自動詞用法に対応する(cf. Van Cleve 1999, 89)。彼によると、演繹論が示すべきはカテゴリーの対象への適合であるのに対し、実際に示されているのは適用のみであるという。カントにおいてこれらの概念に一一対対応する術語はないが、「カテゴリーの客観的妥当性」や「カテゴリーが対象に関係する」といった表現は、文脈により適用と適合のいずれかを意味して用いられていると思われる。

<sup>4</sup> B版の原文では、末尾の括弧内は「第25節」となっている。しかし大半の解釈者とともにガウロンスキーの校訂案に従い、本稿では「第26節」と読む。

<sup>5</sup> ここで、先にヘンリッヒ・中野解釈の裏付けとして紹介した第17節の注は、ちょうどこの箇所につけられている。この位置付けを踏まえると、その注は中野に反して次のような意図を持つと考えられる。すなわち、この注が付けられた本文では、統覚の根源的総合的統一は直観が悟性に関わる限りでの原則としか言われていないが、後半の議論において示されるように、実はこれは空間と時間の単一性の根拠をなしており、それゆえ直観が感性に与えられるときすでに適用される原則でもある。そのため、本文の主張を、統覚の根源的総合的統一は直観が悟性に関わるときのみ適用される原則であると誤読してはならない。注の意図は本文誤解の防止である。中野が考えるように、前半の議論の前提を説明することではない。

<sup>6</sup> 実のところB版演繹論において、統覚の根源的総合的統一は初めから概念的思考作用の根拠として導入されていた。というのもカントは第15節の末尾にて「私たちはこの統一(質的統一としての。第12節)をさらに高いところに、すなわち、判断におけるさまざまな概念の統一の根拠でさえあり、それゆえ悟性の可能性の根拠でさえある[...] ようなもののうちに求めなければならない」(B131)と予告し、続く第16節では節題のとおり、その統一が「統覚の根源的総合的統一」(B131)と名づけられ、解明されることになる。

<sup>7</sup> もちろん、カテゴリーの必然的な適用それのみから必然的な適合が導かれるのではない。そのことはカント自身も自覚しているようである(cf. B167-8)。適用から適合を導くには、さらに、感性的直観の内容が悟性の働きに依存するというテーゼも必要である(カントはこれをB版演繹論後半で証明していると考えられる)。

<sup>8</sup> 岩隈 1992とGomes 2014はこれと同様の見方をとるが、そこに至るまでの理路は本稿と異なる。というのも、彼らは、カテゴリー演繹というプロジェクトの目的を考慮するならば後半では(つまり、演繹論の最後には)適合が導かれているべきであり、他方で、前半の議論からはたかだ

か適用の必然性しか導かれていないであろう、という考察を介して、本稿とおなじ見解に至っている。それゆえ、じつのところ演繹論の手前でカント自身が「適用から適合へ」の構成をはっきり予告しているということには気づいていないようである。

<sup>9</sup>なお、前半が直観の形式としての空間・時間を捨象し、後半ではこれを考慮に入れるということの理由もまた、本稿の二段階構成観によって説明できる。というのは、前半では適用だけ、それゆえ私たちの思考の働きだけに着目すればよかったのに対し、後半では適合を論じる必要がある。それゆえ、私たちの思考能力だけではなく、その対象が感性的直観においてどのように与えられるのかを考慮に入れなければならないのである。

#### [参考文献]

Kant 1998 からの引用は慣例に従い、第一版を A、第二版を B とし、各版における項数を記した。また、引用文中の括弧 [] 内は引用者による補足であり、[...] は中略を表す。

Allison, Henry E. 2015. *Kant's Transcendental Deduction: An Analytical-Historical Commentary*, Oxford University Press.

Caimi, Mario. 2014. *Kant's B Deduction*, Mariá del Carmen Caimi (trans.), Cambridge Scholars Publishing.

Conant, James. 2016. "Why Kant is not a Kantian," *Philosophical Topics*, 44, 75–125.

Evans, Joseph C. 1990. "Two-Steps-in-One-Proof: The Structure of the Transcendental Deduction of the Categories," *Journal of the History of Philosophy* 28(4), 553–70.

Gomes, Anil. 2010. "Is Kant's Transcendental Deduction of the Categories Fit for Purpose?" *Kantian Review* 15(2), 118–37.

Henrich, Dieter. 1969. "The Proof-Structure of Kant's Transcendental Deduction," *The Review of Metaphysics* 22(4), 640–59.

Motta, Guiseppe, Schulting, Dennis, and Thiel, Udo (eds.). 2022. *Kant's Transcendental Deduction and the Theory of Apperception: New Interpretations*, De Gruyter.

Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, J. Timmermann (hrsg.), Felix Meiner Verlag.

Kitcher, Patricia. 1993. *Kant's Transcendental Psychology*. Oxford University Press.

Schulting, Dennis. 2019. *Kant's Deduction From Apperception: An Essay on the Transcendental Deduction of the Categories*, De Gruyter.

Van Cleve, James. 1999. *Problems from Kant*, Oxford University Press.

岩隈敏. 1992. 『カント二元論哲学の再検討』, 九州大学出版会.

中野裕孝. 2021. 『カントの自己触発論』, 東京大学出版会.